

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2023.10.21 No.21



大正期のパンデミック時の人々の暮らしからコロナ禍の今を考える

(小さな学習会④：吉岡講演より)

吉岡理事は大きく4点にわけて報告されました。要旨を報告します。(資料希望な方は事務局まで)

1. 感染症の歴史を知りたいと思うようになったのは

2021年「英雄たちの選択—百年前のパンデミック：『スペイン風邪』との闘い」をBS番組で見たのがきっかけです。100年前のことが何故「コロナ禍の今」に話題になったのか、今直面しているコロナ問題を社会の問題として考えるうえで、歴史的な事実に学び、今日的課題と重ね、それを未来につなぐ必要があるのではないかと思うようになりました。

2. 日本の感染症の歴史への関心

速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』（2006年、藤原書店）が大変参考になりました。内務省衛生局編 西村秀一は当時の公衆衛生局が編集した唯一の報告書で、俗に「スペイン風邪」とよばれたインフルエンザの第一級の報告書です。「大正期のパンデミック」とは、1918年の「スパニッシュ・インフルエンザ」いわゆるスペイン風邪のことで、西村秀一によると、「スペイン風邪」の表記をやめたこと、病名に国名をつけることはその国に対して礼を失している、これから続く人はこの言葉を使わないでほしいと書いている。その立場を尊重し「大正期のパンデミック」としました。西村はさらに人間は感染症との闘いの中で生きている、感染症と共存しながら生きてきたのだと書いています。

なぜ100年前の世界的大流行（パンデミック）が、この事態が今まで話題にならず忘れられてきたかについて、西村は、関東大震災、第1次世界大戦ごろから起きていたこと、明治年間から、流行性感冒以外の呼吸器系疾患で亡くなる人が毎年きわめて多かったことが38万5000人という死者がいたのにあまり話題にならなかったと解説しています。

歴史研究家たちの反省として「人間は常に危機にさらされている」と言われてきましたが、その恐ろしさを身近に感じて生活していたわけではなかったとしています。

武庫川臨床教育学会
<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558
兵庫県西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学教育研究所内

電話番号:075-922-7749 (吉益自宅)
メール: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

3. 大正期のパンデミック時の人びとのくらしから

ここで、『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』にある当時の新聞記事を頼りに、その時の人々が感染症とたたかい生きてきた姿、「死」への恐怖のなかで暮らした姿を追ってみたい。速水は、新型インフルエンザの流行自体を防ぐのは不可能と思われるが、感染症は忘れようが、忘れまいが、「天災い」のように必ずやってくることを、それを防ぐために人間ができることは「減災」への努力である。そのために歴史をしらなければならない、と述べています。その立場で、現代の課題を考えようと思います。

(1) パンデミックが終息するまで

大正期のパンデミックは大正7(1918)年から大正10(1921)年まで続いたといわれているが、実際の状況はどうであったか。速水の資料からは、パンデミックが鎮まり収束するまでの経緯についての記載がなく、収束に向かう当時の社会状況はわからない。資料をさらに調べる必要がある。猛威を振るった時から終息に向かい始めると、人々は安心してしまう。山場が過ぎ去り、過去のことと感じてしまうかもしれない。今もコロナ感染は完全に終息していないが、人々の気持ちが緩んでいることは確かである。

(2) 社会混乱を招く事態

コロナ禍の現在、宅配便が止まり、製造ラインやライフサイクルに支障をきたした。火葬場の割り振りができなかったことも起こった。同じようなことが大正期の事例にもある。大正7年の「香川新報」によると、県下の郵便局員、電話交換手が少なく、半数が欠勤し、生活上の支障をきたした。棺桶不足から、火葬ができず土葬になったという非常事態が報じられた。香川県の衛生課は、インフルエンザの予防・治療に熱心で、感染を様々な手段で回避できるように努力したことも報じられている。大阪の医療関係者の遺言、高知新聞の医療に関する特集なども記録として残っている。京都では感染が蔓延し、医療関係者、学校教員など、社会の第一線で働く人々が、感染を恐れながらも、社会生活を支えなければならぬという人間の役割との狭間で苦しんだ状況が記録に残っている。コロナ禍では、初期に起こった学校の休校措置、オンライン授業への切り替えなど、混乱が生じた。保健所、学童保育、高齢者施設、医療現場は、業務を止めることができず、危険を伴う任務であった。大正期の犠牲者が多かったことを考えると、危機管理、職場環境整備、人的環境整備など、あらかじめ大正期の教訓を生かしていればと思われる。

(3) 地域間格差、生活環境の差からの悲劇

大正7年11月下旬には、新潟市内の流行性感冒が沈静化に向かったようだが、ある集落で一家全員が感染し、二日のちに全員死亡するという悲劇があった。山形県や福島県でも悲惨な事件が起こっている。住民全体、集落全員に及んだところもある。2023年の2月のNHK「かんさい熱視線」という番組で、大阪の西成の様子が放映されていた。訪問看護師のルポである。西成では介護ヘルパーが訪問できなくなり、食事がとれず衰弱したり、病状を悪化させたりする高齢者たちの姿があった。環境の違いから「生命」に対する不公平さが生じる事態が起こるのは、現代社会も同じである。

(4) 医療崩壊の中で人々は

大正9(1920)年に流行性感冒が猛威を振るい、再拡大とともに死者が増加し、地獄絵を見るような事態が起こっている。マスクの生産量が全住民にいきわたらないようにもなった。

人々は厄除け札を貼ったり、ミズを焼いて粉末にした「薬」を飲んだり、ワクチン注射、健康者の血清注射など、あらゆる可能性を求めて様々な治療法を試みていたが、効果を得ることはなかった。

このようになると、人間は、神にすがらしかないという事態になる。同年1月の神戸新聞に、神仏に祈る思いで駅から神社まで2キロ程度の山道をたどり、社務所に用意した護符は飛ぶように売れたと報じている。宮澤清治が「防災歳時記」に投稿した内容である。大阪市天王寺区逢坂にある一心寺の境内には「大正8.9年流行性感冒死者の慰霊碑」があることを紹介している。これは、大正11(1922)年建てられたもので、施主は大阪市東区道修町の薬剤師小西久兵衛・同吉栄とある。小西氏は大阪道修町で薬種商を営み明治末期から「大阪製薬同業組合」の設立に貢献する一人であった。この組合の設立に貢献した人たちには、現在の田辺製薬や塩野義製薬、かつての大日本製薬

など、製薬会社の設立に貢献した人が多数いる。小西夫婦は、当時薬種商を営んでいた。当時薬が品切れ、人々を救うことが十分できず地域の人たちが亡くなることになったことへの無念の思いがあり、地域のお寺での供養を考え、一心寺に碑を建てたのではないと思われる。薬問屋の小西夫妻が、地域で暮らす人々を助けることができない虚しさから供養する思いで建てた碑であると推察する。感染数だけが被害状況ではなく、災禍の中で人々が暮らすには、人としてそれぞれが果たすべき任務ができず、そのことに苦しむ人々がいること、人間が支え合い生きようとしている社会であること、人間の姿を感じる事象である。おそらく、コロナ禍でもそれぞれの立場で任務に就き、十分人を支えきれなかったことへの苦しみを抱いている人々がいるように思う。

(5) 五味淵医師の記録から

栃木県でのインフルエンザ「前流行」期に、五味淵医師がインフルエンザと闘った奮闘の記録がある。五味淵は、彼が住んでいる矢板町にスペイン・インフルエンザが最初に入ったことを知ったのは、大正7（1918）年10月26日、その直後から流行は激しくなり、小学校児童、一般住民等一家が枕を並べて病に伏す有様が多くなり、11月中旬から一段と猛威を振るい死者も増えてきた。彼は、12月8日、自身が発熱した夜、自分自身で血清注射を試した。8日後に妹の発熱に対しても同じ注射を行い、それによる効果があると判断し、12月8日から3月11日の間までに99人、計214回の血清注射を行い、死亡したものの数がわずかであったという結果を出している。医師として事態を悩み、感染症を抑える手段を求めて臨床研究を行っていた記録である。自身が自らの命の覚悟をしながらも、患者の命と向き合おうとする姿は、医者としてというよりそれ以上の強いものがある。コロナ禍の医療現場の医師たちも感染症と闘い、患者の命を守ろうとする姿があり、医師という枠を超えた「人間としての強い信念」を見ることができる。作家で医師の夏川草介の小説『レドゾーン』にも人間としての医師の姿が描かれている。

4. コロナ禍も過去に

2023年、コロナ感染者数もやや下火になりかけ、3月からはマスク着用義務が緩和され、感染症法上の類型が季節性インフルエンザと同じ5類に移行された。政府はウィズコロナを掲げ、今までの日常を取り戻す動きになってきている。コロナも過去のことのようになりつつある今、コロナ禍が人々に不安を抱かせた事実を記録に残していくことは、後世の人々につなぐ意味がある。臨床教育学の研究をする私たちが、そこで生きてきた人々からの経験を丁寧に聴きとり、聴きとったことや、その時の困難な状況を丁寧に書き留め、残す役割は大きいと考えている。

9/9（土）相愛大学フィールドワークの報告

昨年の花園大学フィールドワークに続いて、今回は石本日和子会員、北川健次会員が勤務されている大阪の相愛大学を訪問しました。ポートタウン東駅から徒歩5分、緑に囲まれた大学周辺を石本さんと北川さんに案内していただき、研究室で相愛大学の教員養成、学生の様子に関する懇談をしました。大学の教員養成において、教員採用試験に合格することが主眼となっており、教育観を育むことや、最後まで働き続ける教員を養成する場となっていないこと、「教える」ことが効率重視となり自分の頭で考える機会を生み出しにくいこと、学ぶことは「問い」をもつことだという姿勢を伝えることの意義などを交流しました。石本さん、北川さん、貴重な機会を提供していただき、ありがとうございました。

小さな学習会の案内⑥

11月4日（土）14時～16時 ※ オンライン開催

「続 書きたい気持ちがあるまで」（仮題）

田崎 由子（武庫川臨床教育学会理事） 中谷 梓（大阪公立小学校教員）

◆ 参加希望の方は事務局までメールでお知らせください。申し込みの締め切りは、**10/28（土）**です。

メールアドレスはこちら mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

「子どもに寄り添う」こと

加藤 恵美子（桃山学院教育大学）

臨床教育学との出会い

教室に入ろうとしない子どもを探して、校舎内外を巡回する日々、自問自答の中で、田中孝彦先生にお会いする機会を得て、研究室を訪れました。「ナラティブ」という研究手法、「子ども理解」という視点——初めてお聴きすることばかりでしたが、新たな世界が拓けていく希望のようなものを感じたことを覚えています。その後、大学院に入学し、田中先生、上田先生をはじめ、多くの先生方のご指導を受け、ゼミの仲間を支えられ、自らのささやかな実践にも意味を見出しながら、教師として新たな喜びや楽しさを実感するようになっていきました。

思春期の子ども教師であること

下記の「集会」という詩は、1990年代に私が選択授業で詩の創作に取り組んだときの生徒の作品です。研究の中で、この詩の作者Aさんに出会い直し、語りを聴きとる中で、教師としてのあり様、子どもとの関係を問い直すという機会を得ました。Aさんの詩に描き出された教師像に、はっと胸をつかれながらも、Aさんが「たぶん否定されないという信頼感があった。だから、安心して書けたと思う」と語ったことで、安心できる人と場がいかに重要であるかを教えられました。

現代の思春期の子どもたちは、希薄で分断されたような人間関係の中で疎外感や孤独感等、なんらかの生きづらさを感じながら日々を過ごしています。そういう子どもたちの生活世界への共感的理解、子どもたちの表現の未熟さを否定的に捉えるのではなく、表現に込められた情動・感情を受けとめ、意味ある応答を返しながら、子どもたちが必要としている学びを創造していくことが、求められているのだと思います。

未来の教師たちとともに

この春からご縁があって、教員養成に携わることになり、教師をめざす学生たちと教育について考える日々を過ごしています。彼らは、かつての先生に支えてもらった体験を糧に、「子どもに寄り添える教師になりたい」とまっすぐに教師への夢を語ってくれます。教員志望者の減少、中途退職者・休職者の増加など、教育現場には様々な課題があります。子どもたちが示す現実の前に、悩み、迷いながら、それでも子どもと共に歩んでいく。「臨床教育学」を通して、私が学んできたことを、少しでも伝えていくことができたらうれしく思います。未来の教師たちの純粋な志に力を得ながら、本学会ですらに学びを続けていきたいと思っています。

溶かしこまれていく 「集団」に そして 行動から逸れるな	「大丈夫か」 「気分が悪いのか」 規律を乱すな	術師の足音が近づいて来る 予定の一部のよう それすらも	私に気づき始める「個人」達 僅かに術がゆるみ 「号令」と「訓話」の隙間に	(中略) 個人は既に 個人は既に	「考えて行動を」 従順であれ 「自分の意志を持つて」 突出するな 「個性を大切に」 調和せよ	整然と並ぶ黒づくめの集団 教師と呼ばれる催眠術師が 壇上に入り 術を始める	集会
---------------------------------------	-------------------------------	-----------------------------------	--	------------------------	---	--	-----------

次回は、今井美樹さんの予定です。

編集後記

▶臨床教育学は歴史から学ぶ。吉岡理事の報告はそのことが貫かれていました。『レッドゾーン』一気に読みました。▶学ぶとは新たな問いを考える。相愛大学、石本・北川会員から学んだことです。▶次回の小さな研究会でみなさんとの出会いを楽しみにしております。<文責：吉益>